

学習者のための認知英文法の問題点

田 中 実*

Problems on Cognitive-Based English Grammar for Learners

Minoru TANAKA

要 旨

近年注目されてきている認知アプローチによる英文法を取りあげ、それが持つ問題点を考察した。従来の英文法学習はルールのためのルールを覚えるというものであるが、認知アプローチによる英文法は、ルールの背後にある意味、そのルールの動機づけ、さらにはルール間の関係を示してくれる。そして、なるほどと思わせてくれる。だが、その教育的効果には疑問があるし、内容的な不備も見受けられる。問題点として本論文で取りあげたのは次の6項目である。教育的効果の観点から、(1) 文法の説明が長く、(2) 難しいことが多いため、これに対処できる学習者を選んでしまう。内容的には、(3) メタファー・メトニミーの説明は自明すぎるが多く、(4) 従来からある説明が新たな認知的視点からの説明かのように記載されていたり、(5) 不用意にコア・アプローチ (一つの形に一つの意味) を適用しすぎであり、しかも(6) 時には「なるほど」という説明がないこともある。そして、最後に本論文で詳細な考察ができなかった次の3つの点に触れた。認知学習英文法は実際のコミュニケーション・スキルに貢献するかという問題、国際共通語としての英語との関係をどう考えるかという問題、そして用法基盤モデルの可能性である。

キーワード：認知学習英文法、コア、プロトタイプ、認知意味論、家族的類似性

1. はじめに

近年、認知的アプローチによる英文法が注目されてきている。従来の英文法学習はどちらかというとルールのためのルールを覚えるというものであった。それに対し、近年の認知英文法はルールの背後にある意味、そのルールの動機づけ、さらにはルール間の関係(ネットワーク)

*准教授 英語学・英語教育

を示してくれる。そして、なるほどと思わせてくれる。本論文の筆者も、認知言語学の知見を英文法教育に取り入れて実践してきた。そうした中でわかってきたことは、認知的アプローチによる英文法習得への教育（学習）効果はあまり高くないかもしれないこと、そして内容的に不備があるのではないかという点である。本論文では、こうした点を考察して述べていきたい。

なお、ここでの「認知的（認知言語学、認知意味論、認知心理学等）」なアプローチからの英文法を「認知学習英文法」と呼ぶことにする。「学習」という言葉を使うのは、「英語学習者から見た」という意味である。この視点で書かれた文法書を「認知学習英文法書」と呼ぶことにする。

2. 認知学習英文法（書）の問題点

2.0. 認知学習英文法（書）の何が問題になっているのか

現在ある認知学習英文法（書）の問題点を考察していくに際し、具体例として挙げられるものは数多く存在する。ここでは、何が問題なのかを示すことを目的として、問題の種類、その代表的な例をしめすこととする。

- ・文法の説明が長い
- ・文法の説明が難しい
- ・メタファー・メトニミーの研究はあまり役に立たない
- ・新たな認知的説明、実は従来からある説明
- ・コア・アプローチ、One form, one meaning の問題点
- ・「なるほど」という説明がないこともある

2.1. 文法の説明が長くなる

認知学習英文法（書）は、最近の傾向としてわかりやすさのため文章より絵、イラストなど視覚的なものが多く使用されている。だが、結局は言葉による説明が極めて多くなっている。例えば、大西（2003）の使役構文のイメージについて語ったところである。11 ページあり、著者本人も書いているように説明に疲れてしまう。これも著者本人が述べているが、イメージ的に簡単に捉えられるべきものである。だが、イメージで示したものを説明するのに結局は多くの言葉を要してしまっている。

動詞、時制、相の説明を例えば今井（2010）では 59 頁（135 頁～193 頁）を裂いている。もちろん、イラスト等もそれなりあるが、言葉による説明が多い。参考にその箇所を示す目次のページを記しておく。

第9章 時制の表現法

—英語には時制がいくつあると思いますか？— p.135

- 9.1. 英語の時制はいくつあるか？
- 9.2. 過去形のイメージは距離感
- 9.3. 未来を表すには？

第10章 相の概念（単純・進行・完了）

- 10.1. 相（aspect）
- 10.2. 単純相
- 10.3. 進行相—V-ing 形の意味
- 10.4. 完了相—have+V-en の意味
- 10.5. 時制と相を用いた表現法
 - 10.5.1. 現在
 - 10.5.2. 過去
 - 10.5.3 未来：will による予測の世界（will は現在形）
- 10.6. 動詞の原形のイメージは？
- 10.7. 時制についてクイズ形式で理解を深めよう

第11章 過去形と丁寧表現

- 11.1. 過去形のコアイメージ
- 11.2. 相手からの距離感を表す過去形
- 11.3. 現実からの距離感を表す過去形
- 11.4. 丁寧表現を作ってみましょう
- 11.5. 過去形を用いた興味深い表現

第12章 動詞の二つの用法

—動詞に状態動詞，動作動詞という区分があるの？

- 12.1. 名詞の二つの用法（おさらい）
- 12.2. 動詞の完了用法と未完了用法
- 12.3. 現在進行形と現在単純形の違い
- 12.4. 現在単純形と現在進行形の意味の比較
- 12.5. 現在単純形について補足（発展）

田中（2008）は、名詞、冠詞を次のように説明している。ここでは、140頁～149頁の10頁をそのままコピーを引用した。

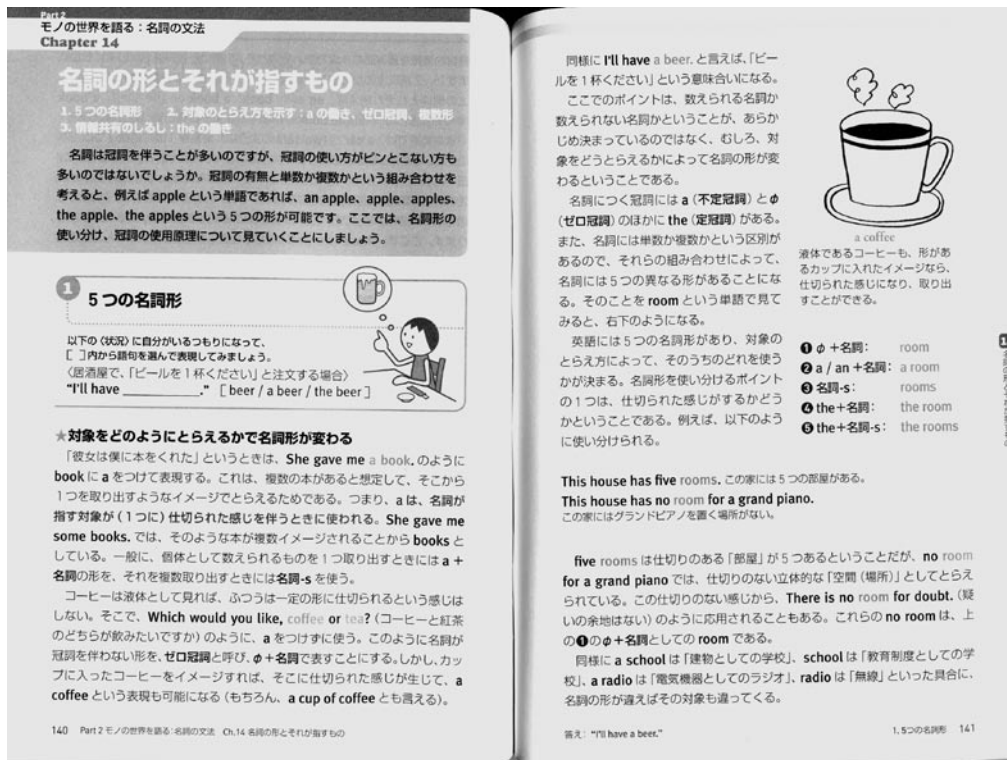


図 1 田中 (2008) 名詞と冠詞

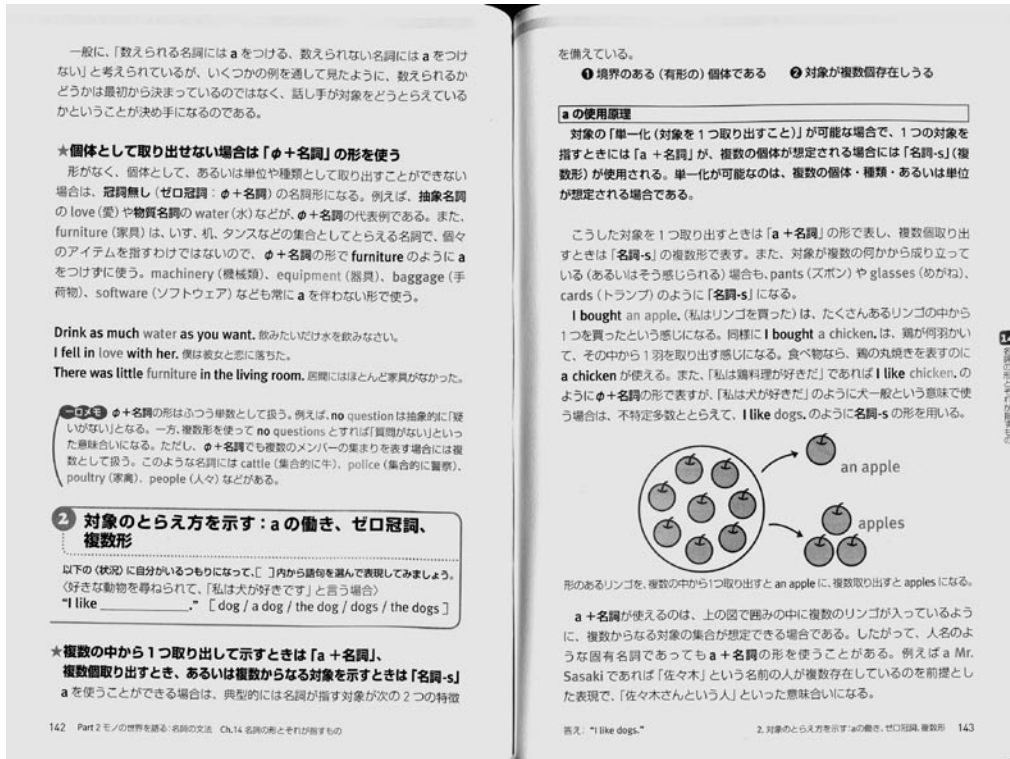


図2 田中(2008)名詞と冠詞

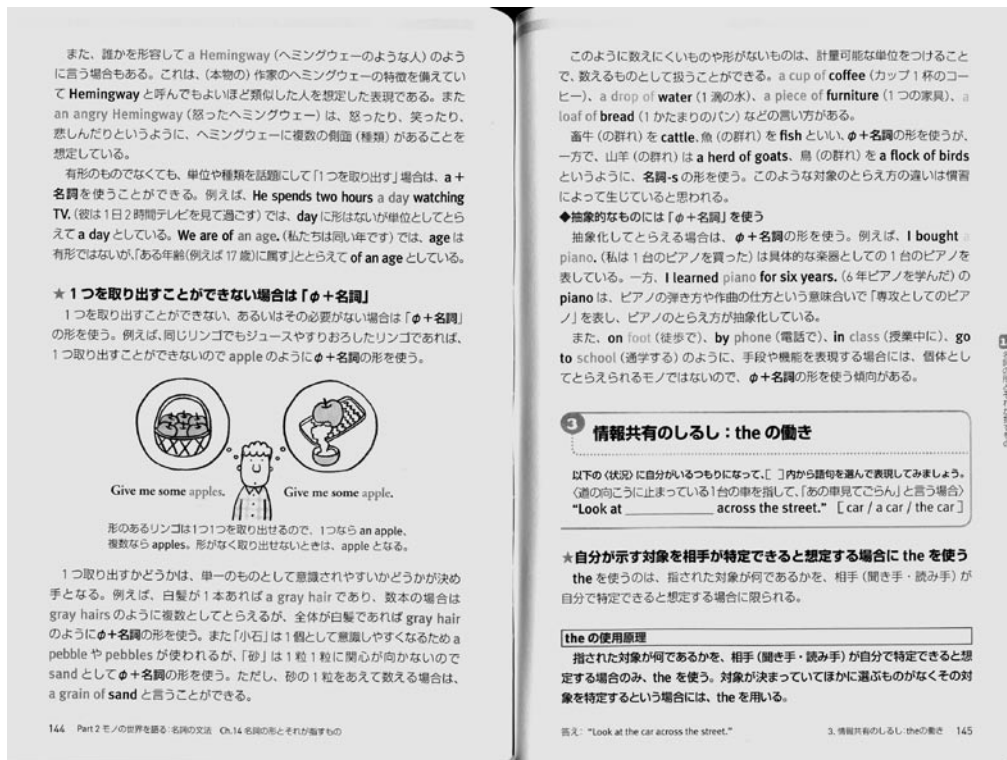
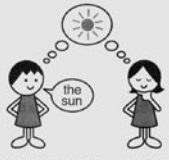


図3 田中(2008) 名詞と冠詞

学習者のための認知英文法の問題点

a が使えるかどうかは、対象をどのように認知するかによって決まるが、**the** が使えるかどうかは、認知した対象がどれであるかを、話し手と聞き手が相互に理解できるという共有感覚があるかどうかによって決まる。この共有の感覚には、以下のように「**文脈的共有**」「**指示的共有**」「**常識的共有**」の3つのタイプがある。



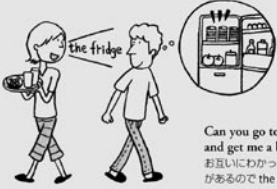
どれを指しているのか、相手は特定できると想定する場合に **the** が使える。

◆**文脈的共有**
 名詞が指す対象がどれであるかを、文脈によって特定できる場合が、**文脈的共有**。すでに会話などでふれた対象を取り上げる場合と、その対象がどのようなものであるかをこれから説明する場合の2つがある。
 例えば、**I bought a car and a bike. The car is excellent.** (車とバイクを買った。その車は素晴らしい) では、はじめに車を買ったことが語られているので、**the car** がどの車のことを特定することができる。一方で、**The man I'm going to introduce you to ...** のように、いきなり **the man** と言う場合がある。これは「君を紹介しようとしている男性」ということで、後続の **I'm going to introduce you to ...** が、**the** の使用を可能にしている。このように、対象がどのようなものかを後から説明する場合に **the** を使うこともある。

◆**指示的共有**
 何かを指示する(指差す)ことで相手と対象を共有する場合がある。**Look at the car across the street.** (通りの向こう側の車を見て) は、話し手と聞き手が通りの手前において、お互いにどの車が特定できる状況にあるので **the** を使っている。ただし、この場合は対象が1つで特定可能なことが条件であり、複数の中から1つを指差している場合は、**Look at that car across the street. It's John's** のように言い、**the** は使わない。

◆**常識的共有**
 ある集団内で常識とされていることを前提に、相手も対象を特定可能であると想定する場合。例えば、**How can I get to the post office?** (郵便局へはどう行けばいいですか?) は、**the** をつけて **the post office** を特定可能な対象として示すことで、「最寄りの郵便局」のことを指していることが相手にも常識的にわかるだろうと想定した表現だといえる。

また、**Can you go to the fridge and get me a beer?** (冷蔵庫に行ってビールを取ってきてくれない?) と家と言った場合、その家庭に複数の冷蔵庫があったとしても、ビールが入っている冷蔵庫がどれであるかがお互いにわかっていたら **the fridge** と言うことができる。



Can you go to the fridge and get me a beer?
 お互いにわかっているという共有感覚があるので **the fridge** と言っている。

最上級や序数などを使う場合も、対象を1つに限定することで共有されるので **the** が使われる。**a member of the most popular team** (最も人気のあるチームの一員) や **the first person to speak** (最初に話す人) がその例である。**He is the best singer in the world.** (彼は世界で一番の歌手だ) でも、**the world** (世界) は常識的にわかるし、**the best singer** は一番と限定されることで、対象が常識的に特定される。

また、常識的共有の **the** には、典型的なイメージの共有を示す用法もある。**He is the actor,** で **the** にストレスを置いて **[ði]** と発音すれば、「彼はまさに俳優だ」といった意味合いになる。これは俳優の典型的なイメージが常識的に共有されているということとを想定した **the** の用法だといえる。

I used to play the piano, when I was a child. (子どものころにピアノを弾いたものだ) も、ある特定のピアノを指すのではなく、「相手も自分も知っているピアノ」を話題にしている。これは典型的なピアノを示す総称的な用法だといえる。

図4 田中(2008) 名詞と冠詞

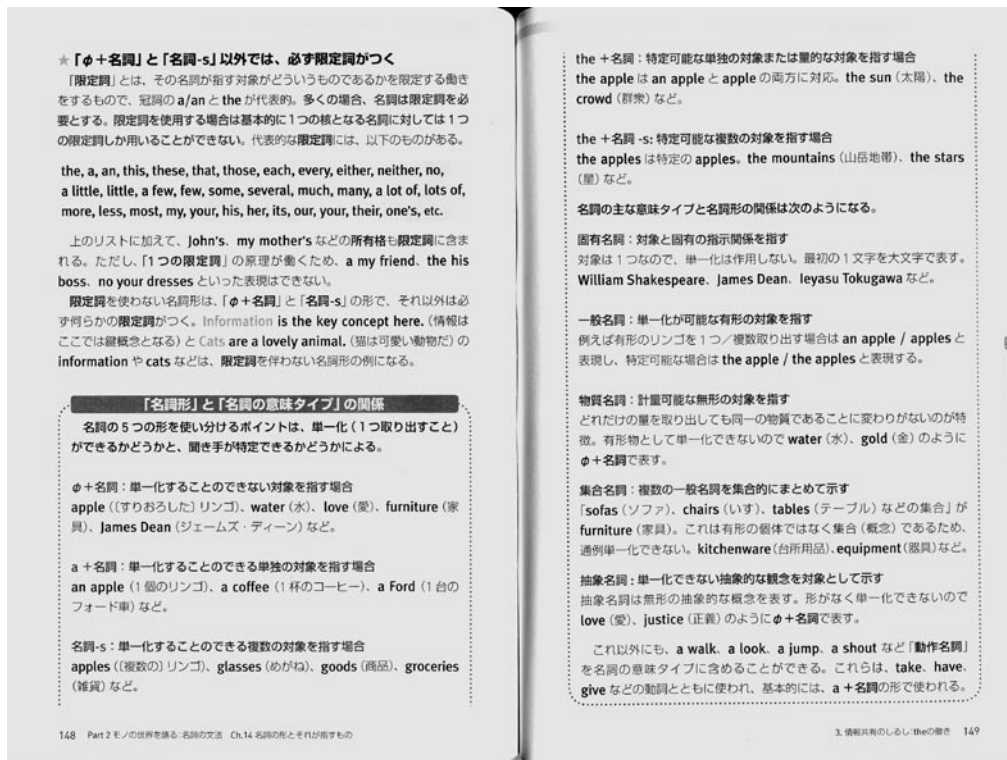


図5 田中(2008) 名詞と冠詞

わかりやすく、面白そうなイラストも多く、またなるほどという説明も多いわけであるが、読まなければいけないところも多い。すでにある程度英語能力のある学習者にとっては、これまでモヤモヤしてうまく理解できなかったところに、この説明により「なるほど」とすっきりさせてくれるのであろう。だが、英語苦手な者にとっては、読むのが疲れる。英語苦手、文法苦手な場合は、こうした説明はなかなか読む気にならない、授業でこのような説明をすれば寝てしまうだろう。もっとも授業の場合、文字が説明の主となる媒体ではなく、本では文字説明になるところも話せば工夫次第で聞く方は楽になり、面白いとも感じるであろう。

さらに、英語基礎力をどうしても身につけられない学習者にとって、これが面白いと言えるかどうかだけではない。たとえそうした学習者にとってこれが、なるほどと理解できて、面白いと思えても、これによってこれまでつかなかった英語基礎力が身につくであろうかと疑問に思われる。少しは期待できるころはあると思うが。

2.2. 文法の説明が難しい

認知言語学は高い認知能力、理解能力を要求するように思われるが、易しく解説したと思われる認知学習英文法（書）も認知・理解能力を要求する。「わかる」をうたい文句にしているはずなのであるが、実際はかなりの知的負担になる。文法の、あるいはもっと一般的に言語の、こうした認知的アプローチに適性のある学習者にとっては大いにメリットになるところもあると思われる。だがそうした適性のない学習者には不必要に負担になるように思われる。第二言語、外国語学習には確かにそういう言語の分析的な理解も必要とは思いますが、もっと直感的にわかるように工夫されていてもいいと思う。

田中（2008）はイラストも多く、文法項目の提示の仕方も明らかに英語学習を目的にしたものである。文法を「使い分ける」「使いこなす」を目的としている。だが、その「はじめに」の項目を見ると使われている用語も説明・内容もかなり難しい。「言語は人々の世界のとらえ方を反映」「表現する主体」「意味的な動機づけ」「テンス・アスペクト」「HAVE 空間」「形が同じなら共通の意味」「文法項目のネットワークが可能になる」「新しい文法のパラダイム」。これもある程度英語能力のついた学習者にとっては、なるほどと思われる最新の知見を含んだものであるのかもしれない。英語上級者であれば面白く読めるし、大いに勉強になる。だが、英語初級者、苦手な英語を克服したいと思う学習者には難しすぎると思われる。

佐藤・田中（2009）は、どちらかという英語教育者向けに書かれたものと言える。したがって一般読者にはやはり難しいであろう。まして英文法の苦手な学習者がそれを克服したいと思うような場合、極めて難しいであろう。また、英語教育者がこれを読んで、教室かどこかで応

用しようとした場合、文法説明が（長く）難しくなると思われる。

今井（2010）では、この辺の事情が明瞭に表れていると思う。この著書のカバーの裏に「これまでの英語学習ではすっかりしないと感じている大学生や社会人、英語科教育法受講生などを対象としました」と記してある。著者自身、2011年9月16日の認知言語学セミナー（日本認知言語学会主催）において、認知言語学的視点の英文法は中高生には難しいだろうと述べている。

2.3. メタファー・メトニミーの研究はあまり役に立たない

認知意味論研究からのメタファー、メトニミーによる説明はどれも自明すぎるが多く、その意味で役に立たない。もちろん全然というわけではないだろうが、貢献度は低いと思われる。

メタファーの例。今井（2010: 57）は、*He is in love.* の例文を挙げて次のように説明する。「*in* は『空間内にある』という意味で、*He is in the library.*（彼は図書館にいます）だと、彼は図書館という空間内に物理的に存在するわけですが、*He is in love.*（彼は恋愛中）では彼の気持ちが恋愛という心理状態にあると、恋愛という心理状態を容器に見立てて表現しています。」このように認知意味論の説明は長くなってしまいが、「彼は恋愛という中にいます」と説明するだけで学習者はわかる。長い説明で、しかも「心理状態を容器に見立てて」という表現はことがらを不要に難しくするだけである。ここにはないが、「容器メタファー」などに言及してしまうと、さらに説明が長くなり、難しくなる。言っている内容は簡単であるにもかかわらずである。さらに、今井（2011）は、*I'll pick you up in ten minutes.* の例文を挙げて、「拾い上げる」という行為と「車で誰かを迎えに行って、車に乗せる」という行為の類似性を指摘する。これくらいなら、説明も簡単であるし、*pick up* のメタファー的意味拡張であるので、それなりに有益と思われる。だが、いまさら認知意味論に言及しなくても以前からふつうにある比喩的拡張の説明である。

認知意味論では「方向メタファー」もよく取りあげられる。例えば、物理的な上下（*up-down*）と健康状態、心理的な *happy-sadness* などの間に見られる類似性のことである。これらも、学問的な面白さはともかく、その意味は説明されなくてもすぐわかる。英語学習にとりわけ必要なものとは思えない。

メタファーは文学的な装飾というだけでなく、元来極めて日常的なものであり、それがメタファーだとはすぐにわからないほどのものが多い（Lakoff and Johnson, 1980）。*I spent the last weekend on camping.*（*TIME IS MONEY* メタファー）とか *I'm feeling up.*（*HAPPY IS UP* メタファー）とか言われてもそれがメタファーだとはすぐにはわからない。したがって、日常的な

メタファーの説明は英語学習という点からはほとんど不要であろう。もっとも、英語文化に特殊なメタファーは説明がいる。例えば、*Life always seems like fourth down and ten to me.* (McCagg 1997: 31) で *fourth down and ten* を理解するにはアメリカン・フットボールの知識が必要である。

メトニミーの説明も自明かそのような説明をしなくてもわかることが多い。今井 (2010: 58) は「熱いものを食べるとメガネが曇って困る」とメトニミーの例を挙げている。「曇るのはメガネのレンズですが、普通、このようにメガネという全体を指す言葉を使って、メガネのレンズという部分に言及します。」と説明している。だが、ここのメガネの意味を理解するのに何も困らない。わざわざメトニミーだと指摘されなくても、意味するところはそれこそ無意識にわかる。これは日本語の例であるが、次のような英語の例でも同じである：*The kettle is boiling.* Boiling しているのは、*the kettle* そのものではなくその中の *water* である。同じく今井 (2010: 58) に次の例が挙げられている：*John hung up the telephone as soon as his mom came back.* この場合は説明が必要であろう。Hang up は、昔の電話が壁掛け式で、電話を切るのに受話器を壁の電話機本体に引っかけた (*hang up*) ことによる。電話機に受話器を引っかけることは電話を切ることのメトニミーになっている。現在では、受話器を電話機に引っかけて電話を切ることは一般的ではないので、この辺の事情がわからない。したがって説明が必要になる。だが、わざわざ認知意味論的なメトニミーを持ち出さなくても、普通にこの事情を説明すればよい。従来から行われていた説明である。

2.4. 新たな認知的説明, 実は従来からある説明

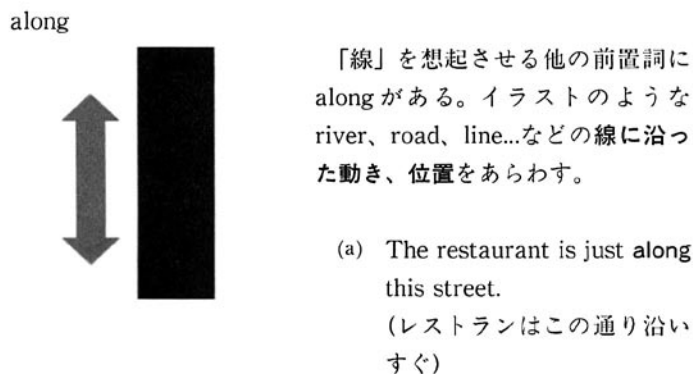
認知的文法の説明は、これまで単にルールとして提示されていたものに、認知的な説明、そのルールの認知的な動機づけを提供するものである。そのことで、これまでモヤモヤしていたものなるほどとわかったり、これまで別々のものとして覚えていたもの間に関連を見いだしたり、あるいはまったく新たな認知的発見を示してくれたりする。例えば従来熟語はそれを構成する単語からは別な意味ができあがるから、個々に覚えるしかないと教えられた。したがって、英和辞典には個々の単語を掲載するのと同じように数多くの熟語が掲載されている。熟語 *take after* は、辞書には「～に似る」という訳しか出て来ない。*take*, *after* のそれぞれの意味に言及することはない。だが、認知文法では、*take* の「取り込む」、*after* の「～の後」という意味に動機づけられてこの句ができあがっていると考える。この説明の「なるほど」感は、*take after* の類義語 *resemble* との相違の説明で再確認される。*My sister takes after my mother.* *My sister resembles my mother* は両者とも良いが、*My sister takes after a famous rock singer.* はダメである、*resemble* なら良い。*Take, after* の意味から、年齢的に先に来るものから遺伝的に取

り入れるという意味になるからである。これに対し、resemble は単に「似ている」という意味。My mother *resembles* my sister. は変だが理屈の上では成り立つ。だが、My mother *takes after* my sister. 理屈上、最初から成り立たない。

だが、認知学習英文法（書）の中には、従来からある文法説明を新たな認知的説明であるかのように掲載していることがある。包括的な認知学習英文法（書）を作成しようとする場合、すべての項目を新たな知見で説明するのは難しいのかもしれない。認知的な適切な説明であれば、従来のものでもちろん問題はない。だが、認知的な説明はこれまでの説明で不十分で、新たな角度からの説明でなるほどと理解させ、言語学習を促そうとしている。従来からの説明を出すのであれば、従来のもので十分だったということである。

例えば、今井（2010）第7章「a と the の使い方」の中で、とくに「7.1. a と the の違いは？」と「7.2. a と the で意味がどう変わる？」において、不定冠詞 a の不特定性、定冠詞 the の特定性について述べている。その説明は、従来からの文法書、辞書の説明と何ら変わるところはない。

次の前置詞 along の説明の引用は大西 (2003: 143) からである。



もちろんここで on を使ってもいい。

(b) The restaurant is **on** this street.

だがそこにはやはり、意識の違いがある。on は線上の 1 地点、along は沿った位置が意識されているのである。

下の例で意識されているのもやはり線だ。

(c) How are you getting **along** these days?
(最近調子はどうですか)

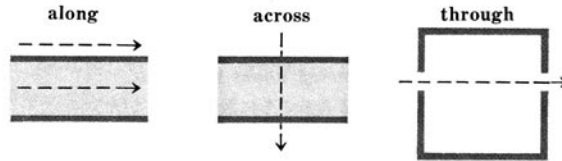
生活の流れが線として捉えられている。そこをどうやって進んでいるのか、この文はそうしたフィールを伝えているのである。

図6 大西 (2003) 前置詞 along

従来の英文法書として1998年出版のロイヤル英文法と比較してみる。ロイヤル英文法(1988: 633)は、「細長いものに関して『～に沿って、～づたいに、～(の上)を』」と説明している。イラストまで掲載している。

(7) **along, across, through**

along	細長い物に関して	「～に沿って、～づたいに、～(の上)を」
across	横断	「～を横切って、～の向こう側に、交差して」
through	貫通	「～を通して、～を貫いて」



There are emergency telephones all **along** the freeway.

(高速道路づたいにずっと緊急用の電話がある)

We walked **along** the highway. (我々は街道を歩いた)

He walked **across** the bridge. (彼は橋を渡った)

He lives **across** the street. (彼は通りの向こうに住んでいる)

The dog ran **through** the fields. (犬は原っぱを走り抜けた)

図7 ロイヤル英文法 (1988: 633) 前置詞 along, across, through

ロイヤル英文法の「細長いものに関して」は大西 (2003) の「『線』を想起させる」と同じである。しかも説明は極めて簡潔である。大西 (2003) の本のタイトルは『英文法をこわす』であるが、説明は従来のものとそう変わらない、「英文法をこわす」ようなところはどこにもない。ただし、大西 (2003: 143) の例文 (c) は、従来 **along** の説明からは省いてしまい、単にそれを使った慣用句としていまがちであるものを、**along** 本来の意味からの動機づけがあることに言及している。この点は評価できる。

その他にも大西 (2003) では、前置詞 **for** の基本イメージを「向かっている (方向)」とし、派生イメージとして目的、求めて、賛成、範囲をあげている。また、前置詞 **to** の基本イメージは「到達点を指し示す」とある。その派生イメージとして、つながりをあげている。だが、先のロイヤル英文法でも前置詞 **for** の「基本的な意味は『目標』を表し、『～に向かって、～のために』ということであるが、今日ではもっと広く、さまざまな意味に用いられる」としている。基本的な意味、その派生として次の意味・用法があがっている。(1) 目的を表す：目的、追求、利害、用途・意図・適性、(2) 方向を表す：方向、賛成・支持、傾向、(3) 交換を表す：交換・代償・報酬、代理・代用・代表、相当・資格、対比、(4) その他の用法：不定詞の意味上の主語を表す、原因・理由、距離・時間。また、前置詞 **to** については、その「基本的な意味は『到達点』である」として、そのさまざまな意味として (1) 方向および到達点を示す：方向・方角、到達点、時間・時期の終点、範囲・限度、結果、目的、(2) 関係を表す：関係・附着、適合・合致、比較・対比をあげている。やはり、大西 (2003) が「英文法をこわす」と

いうほど劇的な違いを見せているわけではない。

ちなみに、『英文法解説』(1991)では、前置詞 for の意味を二つにわけ、ひとつ目の for の「基本的な意味は『～に向かって』である」。そしてその詳細は：方向、目的、追求の対象、適不適、「～として」、交換、理由。ふたつ目の for については、基本的意味はあげず、期間、距離、そして不定詞の意味上の主語を表す意味を記載している。やはり、大西(2003)と変わるところは少ない。

佐藤・田中(2009: 125-129)の it, that の説明も従来からの説明と何ら変わらない。佐藤・田中(2009)によれば、That のコアは、「心理的に離れた対象を『それ』『あれ』として指す」、また it のコアは「話し手が聞き手に状況的に共有していると想定される名詞事情を『それ』として示す」。確かに認知的な意味なのであろうが、伝統的にこれまでなされてきた説明と特に変わっているようには思えない。

中川右也(2009)の『「なぜ」がわかる英文法』は、タイトルにあるように「認知的」な視点を持つ英文法書であり、しかもカバーページに「もう一度英語をやりなおしたい」という句が記されている、つまり基礎的学習者を対象としている。その中には多くの文法項目は通常の文法説明と変わらない。ひとつ例として、関係代名詞の章を見ると、そこには関係代名詞は接続詞+代名詞であり、関係代名詞を使って文と文をつなぐつなぎ方が記されている。そして関係代名詞 which, who の使い分けがその疑問詞用法の使い分けの関係(人か物・ことか)から示されている。伝統文法との違いがわからない。伝統文法も悪くないのではないかと思う。提示の仕方をもう少し工夫さえすればかなりいいものになりそうだ。

今井(2010)の出だしの第1章に、「和訳は英語をわからなくする—英語は日本語に訳せない・訳すからわからなくなる—」と出てくる。いささか目を引く言い回しだが、どうして訳すのが悪いのかと思う。それなら、通訳、翻訳など存在しなくなる。だが実際この章で言っているのは、文字通りの直訳は間違っているからダメ、ということなのである。正当な通訳、翻訳の場合であれば「英語→事態→日本語」となるわけなのだが、「英語→日本語」という字義通りの訳をやってしまうことの弊害を述べているのである。しかし、そうするとそのような主張自体特に新しいものではない。晴山陽一(2008: 97, 123)にもあるように、伊藤(1977)(英語→事態→日本語)、國弘(1999)(英語→イメージ→日本語)などの主張にすでにある。

2.5. コア・アプローチ, One form, one meaning の問題点

認知学習英文法(書)の多くは、コア・アプローチを採用しているように思われるが、そのこと自体に問題がある。

第一には、コア・アプローチに心理的実在性があるのかという問題である。田中茂範氏がさまざまところで、Bolinger (1977) の “One form, one meaning” の考え方を取り入れて、意味のコア・アプローチを実践している。コアとは、ある語彙（語彙とは限らずもっと大きな単位の言語表現となってもいい）のさまざまな意味（多義）に共通する意味と考えてよい。それは文脈依存のない意味で、さまざまな文脈が与えられることで具体的な意味が生まれる。そしてそのどの具体的な意味においてもその背後にはコアの意味が存在する（感じられる）。例えば、佐藤・田中（2009）で田中茂範氏は、例として break のコアを「外的な力を加えて、何か（の形・機能・流れ）をコラス」と記述できるとしている。このコアは、break のさまざまな用法、意味からその具体的な文脈を捨象して中心的な共通の意味を抽出している。だが、このコア、抽出された意味が我々の頭の中にあるという保証はないのである。

第二に、コア・アプローチが不適切と思われる場合がある。田中（1990）において、語彙の認知的な意味情報を捉える上で、コア、プロトタイプ理論の両方の重要性の指摘がすでにある。だが、学習の経済性を重視してかコア・アプローチに傾斜しすぎてきている感がある。なお、田中茂範氏の場合には、名詞の意味はコア・アプローチに不向きとしている。名詞には指示機能があり、それが複数の異なったものを指す場合、その指示する複数の対象が安定しているため複数の語義も安定してくる。

本研究では文法項目を問題としているが、文法項目も語彙同様にコア、プロトタイプ理論から扱うことができる。助動詞、前置詞などは語彙あるいは語彙相当句であるがもちろん文法項目である。前置詞 to と to 不定詞、-ing の形をとる動名詞、現在分詞（進行形、分詞構文）、関係詞と疑問詞、現在完了形、過去時制、現在時制など、コア、プロトタイプ理論から扱うことができるだろう。だが、こうした文法項目もほとんどすべてに渡って、コア・アプローチから扱われがちである。そして、このコア・アプローチが不適切と思われる場合も少なからずある。

コア・アプローチからではなく、プロトタイプの視点から捉えるべき場合がある。例えば、今井（2010）の第9章の「9.2. 過去形のイメージは距離感」および「第11章 過去形と丁寧表現」は、過去形のコアイメージを扱っている。そこでは過去形のイメージは距離感としている。過去形が単なる過去の意味（「現在からの距離」）に使われるだけでなく、仮定法（「現実からの距離」）、丁寧さを表す（「相手からの距離」）のに使われたりするためである。だが、英語を習う学習者からすれば、単純に時間的な過去が過去であり、仮定法、丁寧表現で使われる過去形はその拡張にあると考えるのがわかりやすい。つまり、単純な時間的過去が過去形のプロトタイプであり、そのプロトタイプからの意味展開と考えられる。

文法項目の中には、コア的構造ではなく、いわゆる家族的類似性（family resemblance）的

意味構造を持つと思われる場合がある。佐藤・田中（2009）では、willのコアを「何かをする意志が（今）ある」としている。確かに従来の「意志未来」「単純未来」という説明の仕方に問題があったのかもしれない。特に「～未来」という表現は、willが未来を表すとは限らないわけであるから明らかに問題がある。また単純未来と言うとき、「単純」という意味が「判然としない」という。このような理由でこの文法書ではwillのコアを上記のようにしている。だが、If he is not at home, he'll be in the library.では「『現時点における推量』であるが、それも『現在の意志』からの展開」と説明する。どうしてこのような説明になるのであろうか。いったいこの説明にどのような動機づけがあるのかよくわからない。文法書は、さらに「第三者の意志の有無は推測するほかに、そこから『～する（意志がある）だろう』という『意志の推量』の用法が生じる。さらに意志の意味合いが薄れると、『～するだろう』という『推量』が前面に出てくると説明する。では、“he'll be in the library”は「意志の推測」なのか、どうもそのようには思えない。「彼」が図書館にいることを意志してそれを推測しているとは思えない。「意志」の意味がなくなれば、willのコアを「意志」とすることはできない。そこで何とか「意志の意味が薄れ」と説明して「意志」の意味を保持しようとしているように思える。

ところで、今井（2010）では、willの意味は「予測を表す」とだけしている（コアの意味と思われる）。ずいぶん捉え方が違う。今井の「予測」とする根拠は何であるのかはわからない。「予測」はむしろ「推量」に近い。すると今井からすればwillの中心的意味は「予測」「推量」になり、佐藤・田中（2009）とは相容れない。しかもどちらの場合も無理がある。予測・推量のコアの意味の中に意志があると考えるのも無理がある。したがって、別の解釈が必要である。Willには、少なくとも意志、推量の意味があるが、それは重なるところ、関係するところを持ちながらも、はっきりと異なる意味を持つと考えられる。こうした構造を持つ多義性は、家族的類似性（family resemblance）（Rosch and Mervis 1975）的意味構造として捉えることができる。

整理して図示してみると、will がコアの意味として意志を持つ場合は図8、推量をコアとする場合は図9。コアは全体を包含する意味なので、コアを意志とする図8では推量をその中に完全に含む。推量をコアとする図9では意志をその中に完全に含む。

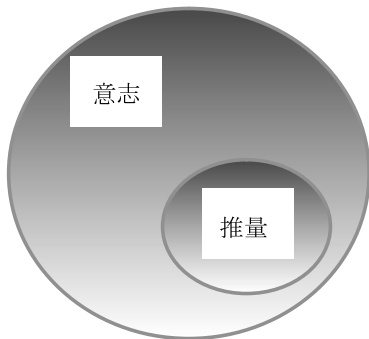


図8 Willのコアが意志の場合

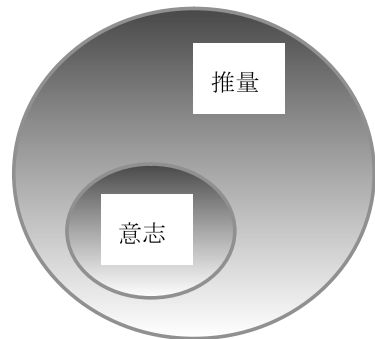


図9 Willのコアが推量の場合

意志と推量の意味を持つ will の家族的類似性意味構造は図10のように表される。意志、推量は関係、共通する意味を持ちながらも別の意味を持つ。この二つに共通する意味を抽出しようとする、本来の意味が失われてしまうと思われる。

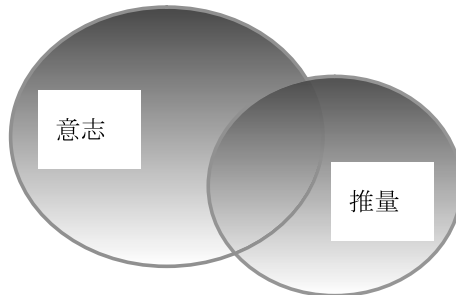


図10 Willの家族的類似性意味構造

なお、意志と推量の意味の関係では、意志の意味を先にするのが妥当ではないと思われる。Will が歴史的にも意志の意味を本来持っているからである。推量の意味はそこからの拡張、展開と考えられる。この点を図示すると以下のようなになる。

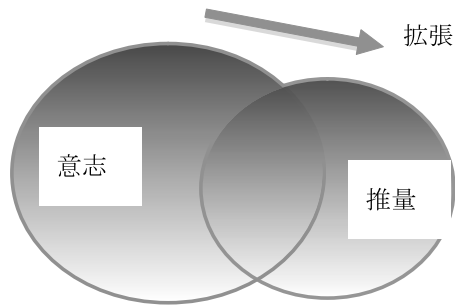


図 11 Will の意味展開

2.6. 「なるほど」という説明がないこともある

認知学習英文法にとって最も重要な「売り」としているのは「なるほど」という説明である。ところが、「なるほど」とは思えない文法項目の説明も多い。例えば、今井（2010）「10.6. 動詞の原形のイメージ」では、動詞の原形のコアイメージを「まだ行われていない」と捉えている。次の例文のイタリックの動詞の共通点を指してこのようなコアを抽出している。‘Just *sit* down.’ ‘*Hold* on.’ ‘I suggested that John *attend* the meeting.’ ‘We’ll be having a party this coming Friday. Would you care to *join* you?’ だが、このコアの意味に「なるほど」という印象は受けない。動詞の原形という形式と「まだ行われていない」という意味の間で動機づけるものを感じられない。

同じ動詞の原形に関して、佐藤・田中（2009）では、提案・助言などを表す *that* 節で原形を用いるのは、「命令法」の応用としている。例：She insisted that her husband *quit* smoking. (佐藤・田中，2009: 157)。意味的には問題なさそうだが、*that* 節内での命令法という考えはちょっと無理がある。

佐藤・田中（2009: 159）の「条件節で用いる SHOULD」, つまり *if* ~ *should* の用法のことである。佐藤・田中（2009: 154）では、*should* のコアを「あることをするのが当然なのだが、いまだなされていない」と捉える。ここから、*if* ~ *should* での *should* の意味を「もし、あることが（まだ起こっていないが）。起こるべくして起こるならば」と説明する。「万一」という可能性の少ないことがらを想定する意味のところ、*起こるべくして起こるならば*と説明するのは、「なるほど」とは納得しづらい。同様に、佐藤・田中（2009: 160）では *in case* ~ *should* の用法の *should* を「（まだそうなっていないが）そうなるべくしてなる場合にそなえて」（下線は筆者）と解釈している。これも理解するのが難しい。これがどのようにして「～するといけないから」「もし～となった場合にそなえて」という意味と折り合いがつかののだろうか。

「なるほど」とはなかなかならない。

学習者向けの田中 (2008: 63) でも、should のコアを「～することが当然なのに未だ為されていない」としている。ただ、そのうち後半の「未だ為されていない」だけを取りあげて、「為すことを強く望む」か「為すことがありそうにない」と思うかによっていろいろな意味が出てくるとしている。「為すことを強く望む」は、コアの後半だけではなくて、間接的だがコアのものから出てくると言える。したがって、まだ納得できる。だが、どうして「未だ為されていない」だけが取り出されて、しかもコアの前半とはまったく相反する「為すことがありそうにない」という意味が出てくるのか。今 *Should anyone arrive late, admission is likely to be refused.* (New Oxford American Dictionary) という例文で考えると、「遅れてくる」ことは [[未だ為されていない] → 「為すことがありそうにない」] の解釈と一応合致している。だがコアの前半部分「～することが当然なのに」とはまったく相容れない。「遅れてくるのが当然なのに」という読みには到底とれない。

3. 結び

認知的文法のアプローチは、文法を単にルールで、それは暗記するものという無味乾燥なものから、意味のあるものへとしてくれる。したがって、文法は意味ある面白いと感じるようになり、またその理解も深まるので、このアプローチは言語学習に期待を持たせてくれる。だが、具体的にその文法書、適用のされ方を見るといろいろと問題があるのがわかる。

まず、概して文法の説明が長くなり、また難しくなることも多い。認知的アプローチでは、単にルールを提示するだけでなく、なぜそのようなルールになっているのか説明する。その分説明が長くなり、ルールそのものは難しくなくてもその説明は難しくなってしまうのであろう。だが、文法の説明が長く、難しくなると、学習者の中には、特に文法が苦手な学習者、まだ認知能力が十分発達していない中・高生には、こうしたアプローチは効果がない。逆効果も考えられる。大学生くらいなら大丈夫かもしれないが、こうした説明には時間もかかり、練習の時間がとれなくなってしまうのではないかと思う。

内容的も問題を抱えている。認知意味論の立場からは、メタファー、メトニミーは大きな興味深いテーマである。したがって、教育現場に応用してみたい気持ちにもなる。だが、内容的には自明すぎるが多く、言語学習には不向きとも言える。おそらく、包括的な認知学習英文法(書)を作成しようとしたためと思われるが、この新しい認知文法アプローチのところに従来と同じ説明が記載されていたりする。従来のものが新しいアプローチの観点からもすばら

しいこともある。ただ、その場合はそのように従来の説明のすばらしさを示しておく必要がある。One form, one meaning. ひとつの形にひとつの意味, コア・アプローチ。これは、魅力的なアプローチである。ひとつの表現形式（例えば単語）に、多くの意味がいたずらに付与されることがある。時にはその語の意味というよりはコンテキストの意味と思われるものが付与されたりする。分かりやすい例を挙げると、それはちょうど *do the dishes* の *do* に「洗う」の意味を付与するようなものである。*Do the dishes* も *do the book*（書評を書く）も *do* の意味は同じで、*the dishes, the book* が意味を作り上げている。このようにコア・アプローチは認知的に極めて魅力的な視点を提供してくれるのだが、上記でいくつか見たようにこのアプローチに適さないとと思われるものまでこのやり方で処理されることがある。最後には、「なるほど」という説明がない場合である。これは認知学習英文法の生命線である。この最後の問題を含め、内容的な問題は今後改善することができる。改善を待ちたい。

今回は考察対象とはできなかつたが、他にも問題点がある。ここでは二つだけ触れておく。一つは、認知学習英文法は実際のコミュニケーション・スキルに貢献するかどうかである。認知学習英文法によって文法、語彙等に深い理解が得られ、俗に言う「ネイティブ」の直感を少しでも理解し、実際に運用できるようになるかもしれない。だが、実際のコミュニケーション・スキルにどれほど貢献するのは少々あやしい。もちろん認知アプローチによって得た知識は役には立つてはあろうが、実際のコミュニケーションにはさまざまな表現を覚え、練習して体得していく必要があるので、文法知識だけではとても間に合わないと思う。

二つ目は、国際共通語としての英語との関係である。認知学習英文法で扱うのは英語母語話者の英語である。最近脚光を浴びている「国際共通語としての英語」は、母語話者の英語とは異なる。非母語話者の英語で、母語話者の英語とはズレていても互いに通じる共通語としての英語である。ネイティブになるように完全に英語を習得することは難しい。また、英語文化に同化することを目的としていない場合である。異なる母語を持つもの同士が英語で意思疎通を図るのが目的で、英語非母語話者同士のコミュニケーションも一般的である。このような場合、母語話者の英語を絶対的な前提としている認知学習英文法とは折り合わないところが少なからず出てくる。例えば、*must* と *have to* の使い分けである。まず通じ合うことを考える場合、このような使い分けは大事ではない。後に上級者になってくれば別であろうが。上級者になっても、相手が例えば初級者でこの使い分けを知っていなければ、この場合も重要でなくなる。最近では、鳥飼（2011）がこの主旨のことを述べている。

最後に、認知言語学で現在提唱されている「用法基盤モデル」(Langacker 2000, Tomasello 2003, 早瀬・堀田 2005, 児玉・野澤 2009) の第二言語学習への応用可能性について触れてお

きたい。このモデルでは、実際の場面で使用頻度の高い低次の言語表現スキーマ・ユニットを言語学習の出発点とする。頻度の高い、実際によく使用する、有用性の高い具体的事例、用法にまず習熟させるのである。そこからさまざまに表現を拡張させていき、それらの間にネットワークを形成させる。認知学習文法が示すルールの背後あるような認知的意味の理解だけでは学習の効果はあがらないと思う。それに対し、このモデルの応用は今後の可能性を秘めていると思う。今後どう外国語としての英語学習にアレンジしていくかであろう。

参考文献

- 伊藤和夫, 『英文解釈教室 改訂版』, 研究社, 1997.
- 今井隆夫, 『イメージで捉える感覚英文法』, 開拓社, 2010.
- 江川泰一郎, 『英文法解説』改訂三版, 金子書房, 1991.
- 大西泰斗, 『英文法をこわす-感覚による再構築』, 日本放送出版協会, 2003.
- 國弘正雄, 『国弘流英語の話しかた』, たちばな出版, 1999.
- 児玉一宏, 野澤 元, 『言語習得と用法基盤モデル—認知言語習得論のアプローチ』, 研究社, 2009.
- 佐藤芳明, 田中茂範, 『レキシカル・グラマーへの招待』, 開拓社, 2009.
- 田中茂範, 『認知意味論: 英語動詞の多義の構造』, 三友社, 1990.
- 田中茂範, 『文法がわかれば英語はわかる!』, 日本放送出版協会, 2008.
- 鳥飼玖美子, 『国際共通語としての英語』, 講談社, 2011.
- 中川右也, 『「なぜ」がわかる英文法』, ベレ出版, 2009.
- 晴山陽一, 『英語ベストセラー本の研究』, (幻冬舎新書) [新書], 幻冬舎, 2008.
- 早瀬尚子, 堀田優子, 『認知文法の新展開—カテゴリー化と用法基盤モデル』, 研究社, 2005.
- 綿貫 陽, 『ロイヤル英文法—徹底例解』, 旺文社, 1988.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Lakoff, George and Johnson, Mark. 1980. *Metaphor We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (2000). "A dynamic-based model." In *Usage-based models of language*, ed. Michael Barlow and Suzanne Kemmer, 2000, pp.1-63. Stanford: CSLI Publications.
- McCagg, Peter. 1997. *Speaking Metaphorically*. Tokyo: Kenkyusha.
- New Oxford American Dictionary 2nd edition*. 2005. Oxford: Oxford University Press, Inc.
- Rosch, Eleanor & Carolyn, Mervis, "Family resemblance studies in the internal structure of categories." *Cognitive Psychology*, Vol.7, 1975, pp.573-605.
- Tomasello, Michael. 2003. *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*, Cambridge, MA.: Harvard University Press,